

郵趣文献の収集と活用

水村 伸行

いま、郵趣文献の研究的収集が、静かなブームになっている。しかし本誌では、これまでこの主題を正面から取り上げたことはなかった。執筆者を探し求めて、ある識者に相談したところ、言下に水村伸行氏が最適任との推薦を得た。私は機会を得て、直接水村氏に面談し、そのご博識に感じ入るものを覚え、本誌編集委員会での協議などを経て、水村氏に執筆をご依頼した。いただいた原稿は、期待以上の内容であり、まさに「これが聞きたかった」という要点が網羅されている。読者諸賢にも、有益な記事として読んでいただけることを確信している。（松本純一記）

1. はじめに

ここ十年ほど、日本の郵趣界において文献収集が盛んになってきたことは、各種のオークションに頻繁に出品され、しかも、それらがかなりの高値、高落札率であることから理解されると思う。

筆者が文献収集を開始した時期については定かではない。なぜなら、何を以て文献収集とするかという定義上の問題があるし、無理にこじつけて定義をおこなったところで、意味のあることではない。強いて言えば切手と同じくらい文献が好きだと言う程度のことである。

筆者の切手コレクションも他の多くの収集家と同じく複数のテーマから成り立っている。そして、そのうちの幾つかについては、過去に全日本切手展においてご披露したことがあるので、ご存知の方もいらっしゃるに違いない。しかし、筆者の切手に対する興味は、自己のコレクションのみにあるのではなく、過去に発行された全切手に対して向けられているのである。つまり大好きな切手をより多く、より深く知るための行動の一つとしての文献収集であると理解していただければわかりやすいと思う。また、現在の研究成果がどのような研究の流れの中から導きだされた結果なのかという途中経過をも重要視しているため、必然的に過去の文献にまで遡り入手に努めている。

このようなスタンスを持って文献収集を続けているのであるが、筆者の文献収集を切手収集のカテゴリーで分類するとゼネラル収集とでも言えるのではないかと思う。

2. 文献収集の実際

A. 情報収集

文献には、切手のように世界カタログというものがない。そのため、いつ、どこで、どのような文献が出版されたのかを知るには、ほとんどが個人の情報収集能力に頼らざるを得ないのが現実である。すなわち、いかに広範囲にアンテナを張り巡らし、情報をキャッチすることができるかが勝負の分かれ目ということになる。ここでは、筆者が主に利用しているa～dの各項目ごとに、情報収集の実際について解説する。

a. 文献目録

文献目録というのは、カタログに近い存在であるが、カタログほどに信用できるものではない。例えば『日本切手カタログ』と言え、日本で発行されたすべての切手について、何らかの形で採録されているものであるが、文献目録の場合はそうではない。これは、文献については公式な出版記録というものが存在しないため¹、文献目録作成者の能力や作成者の思想による取捨選択という行為が少なからず介在するためである。このため、「出版されている」という情報には信頼が置けるが、文献目録に掲載されていないからと言って「出版されていない」ということにはならない。

このような欠点を持っている文献目録ではあるが、目録を開くたびに新しい発見があることも事実である。日本関係として最初に揃えておきたい目録として『日本の郵趣文献目録』²と『日本郵趣文献目録』³をあげることができる。どちらも総合目録を意図した企画であり、編者の1人が同一人

1 国立国会図書館法による納本制度により、全ての出版物が同図書館に納本されるはずであるが、未納本であるものも多く見受けられる。このため、我国における郵趣文献発行の実態を正確に捉えることは不可能である。
2 吉田景保・北上健『日本の郵趣文献目録 明治・大正編』

『日本の郵趣文献目録 昭和前期・1926-1950』『日本の郵趣文献目録 昭和後期篇・1951-1974春』 金井スタンブ商会 1973・1974

3 吉田景保『日本郵趣文献目録』双龍社 1979

ということもあり、内容的には似たものとなっている。雑誌の主要記事タイトルが掲載されていることが特徴としてあげられるが、採録範囲が狭く中途半端であるのが残念なところである。簡易的な付録という程度のものであればよいであろう。

世界をカバーしたものとして *Harry Hayes Philatelic Literature Auctions Index to Lots and Realisations*^{4,5} は有益である。本書は「オークション」の項で紹介するHH Sales Ltdが約30年間に扱った文献を国別、テーマ別に分類し編年体でまとめたリストであることから、本来の文献目録として作られたものではない。しかしながら、その収録数の豊富さから、立派な文献目録としての役割も十二分に果たしている。筆者は、外国関係で調べる場合に最初に開くのが本書である。例えば、自分がある国や、あるテーマを集めようとしたときに本書を紐解けば、どのような文献が過去に発行されていたのかを知ることができるし、過去の落札値も併記されていることから、およその市場価格の目安としても参考になる(図1)。

Cape of Good Hope
Burrus Cape of Good Hope and Boer War collections. Robson Lowe, December 1962. 32pp. 31/1048 *8/-; 33/2197 *8/-; 60/4587 £0.85; 66/1805 £1; 82/7787 £4.50
Rosenthal, Eric; Blum, Eliezer. The Cape of Good Hope triangular stamp and its story. AA Balkema, 1957. 48pp, 4 plates. 28/9445 20/-; 35/3784 20/-; 77/3186 £13; 82/7619 £8
Cape of Good Hope triangulars. Harmer, 1950. 36pp, plates. 43/8917 10/-
McDonald, A; Sefton, D. Cape triangulars. The authors, 1965. 9pp. 52/5979 £1.30
The GH Boucher Cape of Good Hope triangulars and Ceylon Pence. Robson Lowe, 1953. 36pp. 76/2333 *£1.50; 77/3277 £3.50
Stevenson, D Alan. The triangular stamps of the Cape of Good Hope. HR Harmer Ltd, 1950. 142pp, 21 plates. 7/1010 50/-; 14/3071 40/-; 25/7453 *60/-; 29/9861 65/-; 30/201 65/-; 31/1293 60/-; 34/3083 *65/-; 35/3451 65/-; 36/4363 65/-; 41/7503 60/-; 42/8444 55/-; 45/516 £5/5/-; 46/1174 £5/5/-; 49/3775 £5; EE/6776 £12.50; 55/9145 £25.50; 59/4147 £20;

図1 注4文献より“Cape of Good Hope”の一部分。書名などの書誌情報のほかに、オークションナンバー、ロットナンバー、落札額が記されている。

b. 引用・参考文献

本文中に注を付け、章ごとや巻末にまとめられている引用・参考文献も利用価値が大きい。この点については、不思議と日本の場合アバウトであることが多いのであるが、これらの完備していない文章ほど信用の置けないものはない。なぜなら、注というものは論述の根拠を明示し、論述が確実なものであることを保証するためのものだからである。逆にしっかりと引用・参考文献の備わった文章は安心して利用できる。これらの引用・参考文献を元に未知の文献を探し、その未知の文献から更に他の文献を知ることにもできる。すなわち、これらを利用することにより芋蔓式に知らなかった情報を得ることができることも多いのである。

c. 書評

書評を通して、その文献の真価を見極めることは大変に難しい。なぜなら、公平な態度で評されているのかという問題が常に存在するからである。また、当該文献に求めようとする情報内容についても、受け取り手である読者によって異なるため、評者が見落としていた事柄が、購入後に意外と役に立つこともある。したがって、書評については章立てなどの事実記載を参考にすべきで、その評価については読み流す程度にとどめておくべきものと考えている。文献収集の基本は、実物を手に取り内容を確認した上での購入、または目次や内容見本などの事実関係を自ら確認し判断するものであり、決して他人の意見に左右されてはならない。これは文献購入の大原則である。

d. 切手展文献部門

春と秋に開催される全国切手展(全日本切手展、JAPEX)や、年に数回各国で開催される国際切手展の競争クラスには、その一部門として文献部門が設置されている事は皆さんもよくご存知のことと思う。筆者の切手展参観の楽しみの一つに、この文献部門参観がある。日頃から情報収集に余念がないつもりでいても、私家版やローカル誌などとなると情報漏れを防ぐことは不可能であることから、そうした漏れをチェックする場として活用

4 *Harry Hayes Philatelic Literature Auctions Index to Lots and Realisations*, Volume 1-5, HH Sales Ltd, 1993-1997.

5 本書については、次の書評に詳しく紹介されている。正

田幸弘 “Harry Hayes Philatelic Literature Auctions Index to Lots and Realisations”『切手研究』386号 切手研究会 1996

できるのが文献部門なのである。また書名を知っていても現物未確認であったりするものを、実際に手に取って見ることができるのも同部門である。特に国際切手展ともなると、大部分が未知の出版物であることが多く、丸一日は文献部門の参観にあてている。

さて、その文献部門を参観するに際して注意しなければならないことは、手ぶらでは参観しないことである。必ず何かメモを取れる準備をしておくはならない。筆者の場合は「文献探索ノート」と命名しているノートを持参している。そして、自分が今までに知らなかった文献に出会ったときには、「著者、書名、発行者または発行社、出版年」などの書誌情報をメモし、これを元に必要ならば後日入手に努めるべく照会をおこなうのである。

B. 入手方法

よく人から「一体どこから文献を捜してくるのか？」という質問を受けることがあるが、筆者とて何も特別な入手ルートを持っているわけではない。つまり、はるか昔に絶版になってしまった文献や、極少部数しか発行されなかった文献でも、捜し買い求める条件は皆同じなのである。以下に筆者の入手方法について紹介する。

a. 一般古書店

一般古書店と書いたが、そもそも厳密な定義があるわけではないので、ここでは単に国内の古書店と読み替えてもらえればよい。国内には無数の古書店が存在するものの、郵趣文献を主要扱い品目の中に入れている所は皆無であり、一般書や趣味書の一部として扱われていることが大部分である。そのため極端な言い方をすれば、どれだけこまめに古書店巡りや即売会、目録購読などで在庫のチェックをおこなうかが、郵趣文献との出会いの分かれ目となる。最近では古書店側のネット環境が一部の店ではあるものの整備されたおかげで、自宅に居ながらにして在庫のチェックができるようになったのは有難い⁶。いずれの方法にせよ、郵趣文献は膨大な古書の中では極々一部分でしかないので、自分の捜している文献が見つかることの

方が珍しい程度の認識でいるべきであろう。しかしながら、数年前に名古屋の古書店でウッドワードの原著⁷が超破格の値段で売られていたことがあるし、神田の古書店の店先で『日本切手百科事典』⁸の新本美品が800円程度でまとまって売られていたこともあるので、注意深く見て廻ると思わぬお買い得品を見出すことができる。

b. 郵趣文献専門店

日本にはこの種の形態の店が存在しないことから、郵趣文献専門店と言ってもピンと来ない読者が多いと思うが、欧米にはこうした専門店が何軒も存在する。そして、大抵の店が年に1回ないし数回は在庫目録を発行している。中には数十ページに数百冊の在庫リストを掲載している店も有るので、それ自体が立派な文献目録のような役目を果たしてくれている。扱い品も新刊書のみのもあれば、新本・古本なんでも扱っている店もある。また、最近ではホームページを開設し、ネット上で在庫の確認、販売をしているところも随分と増えた。文献商も切手商と同じく、店ごとに特徴があるので、自分に適した店を捜すことが第一歩となる。以下に筆者が利用している文献商の中から数軒を紹介する。

【VERA TRINDER LTD】

<http://www.vtrinder.co.uk/>

店主が「日本の顧客も多い」というだけあって、収友との話題にもあがる店。文献とともに付属品が主力である。ギボンズのあるストランド通りより、少し路地を入った所に店があるので、ロンドンへ行かれる方は立ち寄られるとよい。

【JAMES E. LEE】

<http://www.jameslee.com/>

米国の業者だけあって、米国やカナダ関係はとて強い。筆者も当該国の絶版書をここからかなり手に入れている。

【JAMES BENDON】

<http://www.jamesbendon.com/>

キプロスという少々辺鄙なところにある。各国の新刊書を中心に扱い、自社でも出版をおこなっている。

6 例えば「日本の古本屋」<http://www.kosho.or.jp/>など
7 A.M. Tracey Woodward: *The Postage Stamps of Japan and Dependencies*, 1928, 私家版
8 『日本切手百科事典』普及版 日本郵趣協会 1974

9 例えば *Linn's stamp NEWS* や *The American Philatelist* など
10 <http://stamps.ebay.com/>

【philabooks.com】
<http://www.philabooks.com/Texte.asp?Lang=D&Action=Home>

ドイツの文献商だが、注文は英語で可能。ホームページも英文対応である。定期的にメールでニュースレターを送って来たり、私家版の本でも可能な限り入手に努力してくれる。新刊・古本のどちらも扱っており、顧客対応が丁寧なのが特徴。

c. オークション

切手の入手と同じく、文献でもオークションは有効な入手手段である。特に基本文献とされるもので出版されてから年月の経ったものなどは、文献専門店で探すよりも早く入手できることが多い。文献オークションには数ヵ月おきに定期的開催するところもあれば、年に1回のみ大規模に開催するところ、全くの不定期なところなど実に様々である。年1回とか不定期開催のところについては、雑誌等の広告で情報を集めることが重要である。その他に最近では“ebay”¹⁰等のネットオークションでもかなりの数が扱われており、思わぬ文献が格安で落札できることがある。ここでは定期的に開催しているHH Sales Ltdを紹介しておく。

【HH Sales Ltd】

<http://www.hhphilat.com/hhindex.htm>

「文献目録」の項でも紹介したオークションである。とりあえずの1社ということなら、ここからは始めるのが良い。雑誌、概説書、専門書とあらゆる分野を扱っている。

3. 文献整理の実際

稀覯本は別として、郵趣文献を購入したら利用しなくては意味がない。ここでは、入手した文献を活用のためにどのように整理すればよいのか、筆者の整理方法を紹介していく。

A. データベース

人間の頭は、比較的単純なことを記憶するには恐ろしいほどの能力を発揮するが、少しでも複雑なことになると途端に記憶能力の限界に達する。

すなわち単行本などの単純な書名を覚えることは容易ではあるが、雑誌に掲載された記事名と掲載誌名、掲載号などとなると、すぐに限界に達してしまうのである。筆者もご多分に漏れず、単行本ならば一度目を通したものであれば、大体の内

論文名	日本占領切手のブルーフ
文献名	切手趣味55-4
著者名	R.M.Spaulding,Jr
キーワード	南方占領地切手
論文名	日本占領切手(マライ)への疑問点
文献名	切手趣味61-1
著者名	G.P.COULTER
キーワード	南方占領地切手
論文名	砂川泰氏に聞くケランタン認印切手
文献名	切手趣味63-2
著者名	伊東恭一
キーワード	南方占領地切手
論文名	日本占領下ビルマ郵政初期の記録
文献名	切手趣味64-4・5・65-5・6
著者名	伊東恭一
キーワード	南方占領地切手
論文名	ランボン加刷切手
文献名	切手趣味65-4
著者名	青木四海雄
キーワード	南方占領地切手
論文名	ヨーロッパ駆けある記 (1~2)
文献名	切手趣味78-4~5
著者名	吉田利一
キーワード	旅行記 切手商 プケマ オークション

図2 筆者の「郵趣文献データベース」の一例

容を把握しているの、「このことなら、あの本に書いてあるな」とすぐにわかるのであるが、雑誌掲載の記事となると「あのことは、〇〇さんの書いた、△△という記事があったはずなのだが、何という雑誌の何号だったかなあ…」となってしまいお手上げ状態である。

こうしたことを解決する手段として、データベースの構築をもう十年近く前から行っている。そもそも、筆者個人が自分専用のツールとして作りはじめたものなので公開するつもりは毛頭ないから、データベースと言っても大それたものではない。むしろ極めて単純な設計のデータベースである。入力項目は「論文名」「文献名」「著者名」「キーワード」の4項目のみである。この中で注目してもらいたいのは、「キーワード」という項目が付いているところである。例えば、手彫切手の目打について知りたいときに「手彫切手」と「目打」という2つのキーワードを入力することによって、そのことについて書かれたすべての文献を抽出することができるのである。また、書名や記事名が

曖昧な時にもキーワードで検索を行うと楽である。実際に筆者も「キーワード」検索を最も多く利用している。

このキーワードであるが、多くの種類を登録しておけばよいというものではなく、ある程度柔軟性を持たせた分類を登録しないと、逆にキーワードに振り回される結果となるので注意が必要である。具体例を示すと、谷喬氏による「日本の初期外国郵便」1~11という記事が『関西郵趣』154~162・164~165号に掲載されているが、この記事には「在日外国局」と「郵便史」というキーワードが付されている。この時に「在日イギリス局」「在日フランス局」「在日アメリカ」局などと細かいキーワードは一切無用である。あまりにも細かいキーワードの設定は、データ数が何千と増えたときにキーワード地獄に陥ってしまうことを避けるためである。参考までに筆者のデータベースにより「南方占領地」について検索して得られた結果の中から一部を挿図2(前ページ)に示す。

キーワードを付すことによって、筆者は二次的なメリットもあると考えている。すなわち、ある記事にキーワードを付すためには、その記事を最低でも一度は読む必要に迫られるということである。読者の中には、「そんな面倒くさい」とお思いの方がいらっしゃるかも知れないが、そういう方はデータベースには向かない性格と考えられるので、ご自分の頭だけを頼られた方がよいと思う。データベースとは、じっくりと育てるものだと思筆者は考えている。

B. 整理

筆者はよく「蔵書をどのように整理しているのか？」という質問を受ける。文献を多く持っているとか何か特別な収納施設でも持っているのかと勘違いされるのである。

ここで整理方法を紹介する前に、少しばかり筆者を取り巻く環境についてご紹介する。筆者の家族は現在7人。そして、住んでいる家はというと大

きな屋敷では全くなく、標準的な間取りの借家である。であるから、おそらく世間一般の人達よりも、一人あたりの専有面積はかなり低いものと思う。

このように、ある意味においては劣悪な環境下にありながら、蔵書はどんどん増えている。本来ならば、すべての蔵書を書架に収納して、いつでも思い立った時に瞬時に出せる状態にしておくことが理想ではあるものの、先に紹介したような状況であることから、そのようなことは絶対に不可能である。したがって、必然的に書籍のランク分けを行い収納しているのが現実である。そのランク分けは下記のとおりである。

1. 机の周辺の書架へ
2. 自室の書架へ
3. リビングの書架へ
4. 段ボール箱に収納し押入へ
5. 自宅以外の収納場所へ

以上の5段階分類であるが、おおよそ1から5への順番で重要度が減じてゆくものと考えてもらえば良い。さて、その分類基準であるが、以下のようになっている。

1には、世界各国のカatalogや *The Encyclopedia of British Empire Postage Stamps* Volume 1~6¹¹⁾などの総合的な解説書や事典¹²⁾など、最も使用頻度の高い書籍が集まっている。また、専門で集めているハンガリーやネパール関係もここに揃えており、必要なときには椅子に座ったままでも手に届くようになっている。書架2本分である。

2は、1以外の自室の書架ということであるが、雑誌、各国の解説書などが中心であり、書架6本分である。

3は、2からはみ出た解説書のほか、普段は見ると機会の少ない豪華本¹³⁾や記録書¹⁴⁾、オークションのネームセール¹⁵⁾などが中心であり、書架6本分である。

4は、使用頻度の少ない雑誌やオークションカatalog、そして単行本などであり、中には入手し

11 *The Encyclopedia of British Empire Postage Stamps*, Volume 1-6, Robson Lowe Ltd, 1951-1990.

12 一例を示せば *International Encyclopedia of Stamps*, IPC Magazines Ltd, 1970など

13 一例を示せば *The Work of Jean de Sperati*, British Philatelic Association, 1955など

14 一例を示せば *Perkins Bacon Records*, Volume 1-2, Royal Philatelic Society London, 1953など

15 一例を示せば *The Honolulu Advertiser Collection*, Part 1-3, Robert a. Siegel Auction Galleries Inc, 1995など

16 Manfred Amrhein: *Philatelic Literature*, 1991-2006, 私家版

たときしか見ていないもの(処分するわけにもいかない)も多数存在する。段ボールの数は数えていないので不明であるが数十箱である。

5は、主に重複している雑誌や、旧版のカタログ(旧版でも内容によっては1に収納されている)などほとんど使用することのない本である。

以上のように筆者は分類・収納しているのであるが、このシステムで比較的スムーズに動いていることから、取り敢えずは満足している。1～3についてはオープンスペースなので探しやすいのであるが、4の場合は段ボール箱の中なので書名が見えないことが欠点である。その欠点を補うために必ず段ボールの見える側に収納されている書名を書き込むことにしている。また、ここの押入れは雑誌関係とか、こっちの押入れは単行本とか決めておくと探すときに便利である。

文献の整理・収納には、自分の行動パターンをよく考えながら収納することによって、探す時間を短縮したり、迷子をなくすことが可能となる。たとえ所持している冊数が少なくても、闇雲に書架に突っ込むことだけは避けたほうが無難である。

4. 文献収集3つのパターン

これまでに文献の入手方法→記録→整理について、筆者の経験を紹介してきたのであるが、今後の動向として今まで以上に文献の入手・活用がコレクションを発展させるために重要な要素となっていくものと考えられる。今から郵趣文献の収集を考えていらっしゃる方のために、若干の私見を紹介して本稿のまとめとしたい。

郵趣文献の収集にあたっては下記の3つのパターンに分類できるものと考えられるが、それぞれにおいて若干なりとも方法論が異なってくるので、自分の目指す所を考え文献収集に入っていただきたいと思う。

- (1) 自分の切手収集分野に限って文献収集を行う。
- (2) あらゆる郵趣知識を深めるために、ジャンルを問わずに文献収集を行う。
- (3) ジャンルは問わない点においては2に似ているが、稀覯本なども原本や初版本にこだわって文献収集を行う。

これらの中で最も豊富な資金力を必要とするのは、言うまでもなく(3)であり、中には1冊あるいは揃いで数十万円などということも珍しくはな

いし、雑誌などになると端本が山のように溜まり、処分や置き場所に困ることになる。しかし、原本を揃えたという充実感や達成感は何ものにも代え難いものがある。また、復刻版などでは決して味わうことのできない、言い換えれば本物の気品を感じ取ることができる。ただし、収集にかなりの余力がある方以外は、この道は避けた方がよい。

(2)は多くの方にお勧めしたいパターンである。ある特定の分野に限らず文献収集をおこなうことは、知識の偏重を防ぐことに有効な方法であり、結果として郵趣人としての一般教養を高めることになる。この場合、(3)とは目標が異なるので、安価な復刻版でもかまわないし、入手困難ならばコピーで代用させることも選択肢の一つである。なぜなら、郵趣知識の吸収が第一義的な目標となるからである。

(1)の場合、多くはその道のスペシャリスト、またはそれを目指す方達だと思う。この場合、どのような小さな記事でも該当する記事は入手する必要がある。もちろん原本が無理ならばコピーでもよいが、入手したら何度も熟読することが大切である。そして、研究の成果としてアウトプットする場合には、先人の業績を正当に評価し、その上に自分の成果があることを、注などで明示しなければならない。他人の業績をまるで自分の業績であるかのように書き連ねる方が見受けられるが、他人の成果を利用する場合には、その出典を注にきちんと明記することが最低限必要のことであることを覚えておいていただきたい。

さて、この辺で筆者に与えられている紙数も尽きようとしているが、最後に文献収集を目指す方にぜひお勧めしたい文献を一つご紹介させていただきたいと思う。それは1991年に第1巻が出版され、2006年に第4巻が発行された *Philatelic Literature*¹⁶ である。本書は、著者個人が独力で世界中の図書館や郵趣図書室を調査された上で書かれた文献集成である。本書の特徴は単なる文献リストではなく、各国・各地域ごとの研究の流れと一体化しながらの文献紹介であることから、紹介されている文献の位置づけがより明確化されているところに大きな特徴を見出すことができる。先の文献収集パターンのうち(2)と(3)に該当する方は必読書と言っても過言ではない。先に紹介した philabooks . com より入手可能である。